持って来た此の拳銃で眞先に自分の可愛い部下を殺さねばならぬとは……」

諦観たる顔で兵士達に話しかけた。

其夜十時頃、戦闘指揮所より傳令が各隊に走った

「敵上陸以来既に五日間、我が將兵は優秀装備を誇る十倍に餘る敵軍を邀へて勇戦奮闘、敵に多大の損害を與へたるも、我も亦將兵相次ぎて斃れ、弾薬又缺乏を告げるに到れり。茲に於て我は残存せる全兵力を以て今夜半を期し敵に最後の鉄槌を加へんとす……」

最後の突撃命令である。兵は傷ける足を引きづり、戦友にすがりつゝ攻撃準備に取掛った。

遂ぬの損害により此突撃に加はり得たものは將校約十名、兵百五十を出でなかった。

此狹小な地域に集中する敵砲弾により行動は甚しく阻害されて全滅寸前に陥ったのは四月十一日午前三時頃であった。井川部隊長、諸江大尉の指揮する主力二隊は此の動乱の中、幾多戦友の血潮を吸った岩石地帯を攻撃する

て、せき友の布ひ会戦をせんとし、草牧中尉等の二中隊は残りは工兵隊方面に
朝五時ごろ、照明弾の照らす夜の野へ、おのおのとして壕を掘った。
此夜、敵戦車は盛んに引き続き城山を取巻き、殊に城山東麓に群がる戦車群
より射つ戦砲と機銃は、城山の東南方面と南西方面を吹雪の如く吹き掃って居た。指揮
班員を率ひて壕を出た一中隊長吉岡中尉（熊本県）は此の弾雨の為めに敵死し、
其外一中隊の部の特兵の多くが此のために無念にも傷付き、或は戦死した。
其後も山前面には最後の激闘が展開された。敵戦車よりの機銃声と友軍の
小銃手榴弾は錯綜した。敵は時の線に戦車の列を敷いてゐた。其嵐の如く吠え猛る
弾雨の為め、味方は次々に斃れた。井川部隊長も少し後前面に於て敵弾を
左上膊左胸部に受け、最早是迄と持った拳銃により従容として見事な自決
を遂げられた。飛行場方面に向った草牧中尉も其の夜の突撃に散ったと聞
く。

飯に何時しか夜は明けて居た。敵は盲滅ちして本る。生き残った者は止むなく各所壕に入って夜を待った。斯くて指揮官を失ひ、戦意喪失した下士官兵は、其後数人宛壕に潜んで、夜になれば出て敵陣に斬込みを加へた。

「一日でも長く敵の今江島を全占領を妨害し、一人でも多くの敵兵を殺せ」

との部隊長の訓辞に生きて、飢えに耐へ、渇に苦しみ、痛みをこらへて、遊撃戦は尚長く續けられた。

附記

未詳「伊江島デイリー・ニュース」九月三日号より

伊江島は硬くに難い果実であった。琉球列島に関する戦況報告は中城湾島にのみ集中されるが、伊江島攻略はその困難な点に於て他の二つの島、即ち「カヤレン」島及び硫黄島に於ける血醒い戦闘と類を同じくするものであった。ニューヨークの誇り第七十七師団は二日にわたる午後の戦闘の後伊江島を攻略した。伊江島攻略は日本本土進攻の際の空ようの路を拓く点に於て重要であった、伊江島占領に於ける最も難儀な事は伊江城山の制圧にあった。報告者は此の山を地獄の山と叫んだ。此の山は海抜六〇一呎、コンクリート(砲礎)の堅固の部落の背後に従事へて、三群のトーチカが之れを取囲み、全山が砲座と蓋って居た。全体が地下道により連絡されて、堅固な要塞を形成し、此処に五千の信念に凝った日本兵が據って居た。

伊江島は東西五哩、南北二哩半、琉黄島より稍小さく、その半分は硫黄島同様に堅固で

(12×25)

(NHK 3)

あった。そこで孤立の伊江島攻略には第一師団が主の攻略に従事した。
第一師団、アルースウ特の率ゆる第七十七師団は俊敏なる日本軍と相対した。日本軍は
あらゆる知恵を絞って、来一月間覚悟にすべてを隠蔽していた。そして我々第七十七師団の
将兵を知らん顔をした。彼等は島の西部に於ては、わざと弱い抵抗を示した。それで我々
は西部海岸を突破して伊江城山周辺に陣ったる敵の牙城へ嵐の如く突進した。
然し乍ら第一師団は盲目的な無謀な攻撃はしなかった。彼等は翌十五日上陸し、十六日朝強行
軍を敢行し、注意深く進んでその日の午後城山の敵の虎穴へ進んで行った。斯くして
勝時にして血みどろな闘争が展開された。日本軍は既設陣地より七十七師団
の喉元を見下して其処へ弾雨を注いで来た。然しながら日本軍は充分の武器弾
薬を持っていなかった。四月三十日は或は伊江島を占領した。然しながら戦闘がそれで
終結したのでは無い。分散的な遊撃戦は其後も続いて七月三日迄継続した。

(12×25)

伊江島女子救護班

戰雲急を告げた昭和二十年二月下旬、伊江島民間の志願者と軍との種々で、伊江島少年義勇團、伊江島女子救護班、伊江島婦人協力隊が夫々編成された。全く各人の自由意志により募られたが、義勇團隊は二百名、救護班は百四十名、協力隊六十名許が集った。

そうして救護班は十七才より三十五才迄の独身の女子で、教育を受けて戦闘中衛生兵を助けて傷者方面の手助けをなし、協力隊は三十五才以上の婦人で軍の炊事等の雑役を行ふものである。編成と同時に教育が開始せられ、毎夜數時間宛衛生訓員により各般に亘る教育が施せられ、予想される実戦に直ぐ役に立つ様に、教へる方も、学ぶ方も真の剣に挙ぐる悲壮な気持で勉強した。情勢は日に悪く、住民の避難疎開は行はれて、珊瑚の海も、遂に毎日の様に海を越へて本部半島へ渡って行く。恵しい肉親と別れて、故郷とは言へ、戦雲濃厚に迫る離島に、女人が地獄の如く恐れる伊江島に踏留まる決意の胸中は、敢に死を決した崇高なものがあった。父親に頼まれて軍医が避難疎開をすすめ

ても、友と共に、兵隊と共に故郷で死にたいと言って肯じなかった娘もあった。

◎敵の上陸して、激闘が繰返されたが、その間故障船員は各隊の各壕に三人、四人と配置されて、勇ましい衛生兵を助けて兵隊の治療に看護に獻身的努力を捧げた。

男も顔を背ける様な酷い負傷が多かったが、震へる手を制しながら、兵を慰め、いたわりながら、白い繃帯を巻いてやるうら若い娘達の姿は、いぢらしくも又尊いものであった。

伊江島は水の非常に乏しい島である。激闘から帰り、激闘に出て行く兵の水に事欠くすべもなく水であった。故障船員は協力隊員を助けて、夜毎々々村の中へ出て水を運んだ。

砲弾に荒らされて道もなくなった廃墟の中を、照明弾が上れば伏し、砲弾が落ちれば命こそ行く水波みは、全く命懸けであった。然し誰も苦しみを訴へなかった。いや、そんな事を言ふ暇もない程に忙しい日が夜が続いたのである。

独立機関銃中隊の壕が爆砕して部員四名が最初の尊い犠牲となった。「ミヤト原」

◎遺隊の変化な最期の日、五名が兵と死を共にした。その後高地での激戦には書間

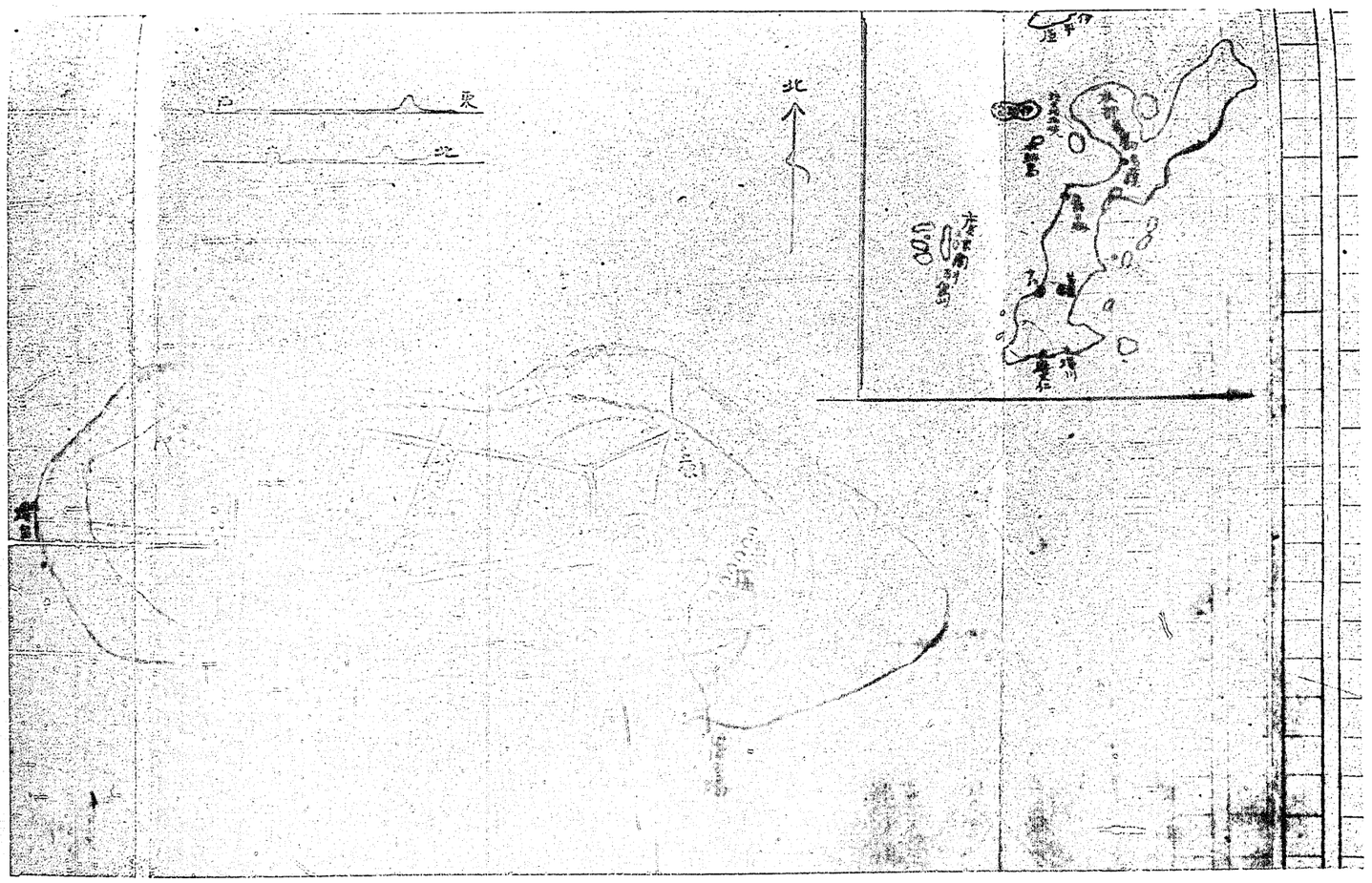
兵士等は戦線に立つた者もある。御陵の最後の突撃戰の際には多くの者がその突撃行に加はつた。斯くて二百名の救護班員、協力隊員の殆んど全部が部隊と共に伊江島に渡つたのである。

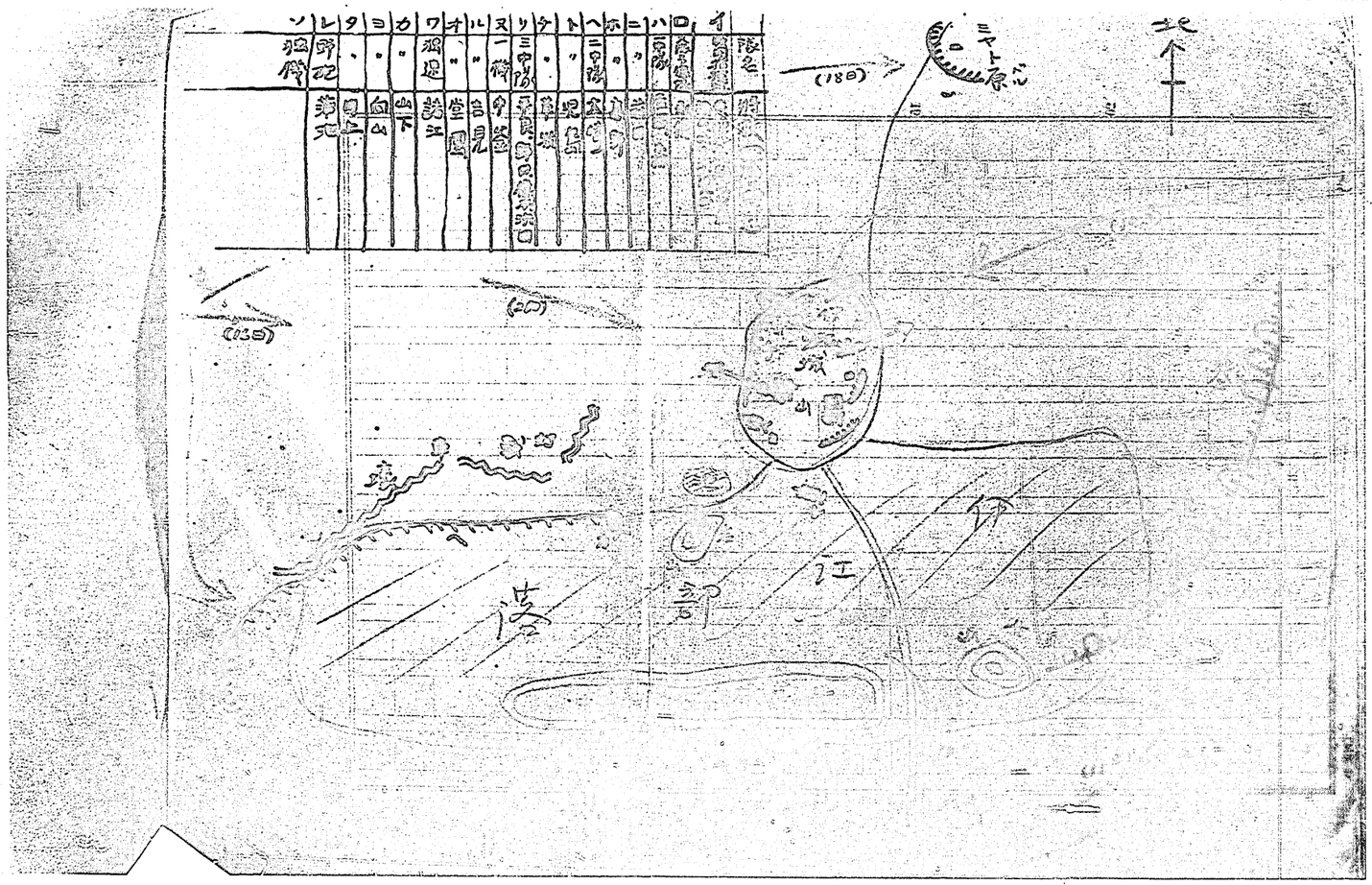
一、皇國のつはものを　三、時は彌生の中ノ頃
敵撃て共に政御を　東敵復す父祖の土地
守うんものと呼ひたる　空に敵機の數知れず
花も散ふる百數十　敵艦島を取巻きて
ほ居伊江島救護班　仰ぐ城の山悲しき

二、日ごとに繁盛する　四、夜毒ガスの奮闘に
病人も直ちに軽くなく　傷つく兵をいたわりつ
夜毒に呼かランプ知に　命と共のまに清水を
響く機関銃止五法　遥ぶ夜路に弾雨降く
主角中の勇戦し　友呼ぶ声も途絶へがち

五、激戦既に個を越へ
忠勇比なき皇軍も
衆敵の為め弾盡きぬ
是迄なりと我れ亦
加はり行かん突撃今

六、嗚呼南溟に風荒ぶて
縣鼎の花の落ちる宵
沖縄乙女の殉忠を
永遠に傳へむせび泣け
伊江城山の松の風


東
北
北


(180)
(90)
(270)
(0)
城
海
江
ミヤト原